同志社大学
学生支援センター　障がい学生支援室
http://challenged.doshisha.ac.jp/

今出川校地　寒梅館 1 階
〒602-0023 京都市上京区烏丸通上立売西入御所八幡町 103
Tel.075-251-3273 ／ Fax.075-251-3099
E-mail：ji-care@mail.doshisha.ac.jp

京田辺校地　嗣業館 1 階
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3
Tel.0774-65-7411 ／ Fax.0774-65-7024
E-mail：jt-care@mail.doshisha.ac.jp

amaneku 2012 vol2

同志社大学 障がい学生支援室

障がい学生支援広報誌「あまねく」第2号発刊によせて

学生支援センター所長　真銅正宏

関係各位におかれましては、日ごろより同志社大学の障がい学生支援の取組みにあたたかいご支援、ご協力を賜り、まことにありがとうございます。

昨年度末に創刊いたしました本誌、障がい学生支援広報誌「あまねく」は、おかげさまで、多くのみなさまからご好評を得ております。

さて、2011年度は、その直前に起った3.11の東日本大震災という未曾有の大災害により、我々の記憶から拭い去ることのできない悲しい年となりました。大きな揺れに続いて沿岸を襲った巨大津波が、実に多くの人命を奪っていきました。また、安全をうたわれていた福島の原発は、津波により、一時、制御不能な状態となり、そこから漏れ出す放射性物質は、海や野山を汚染し、多くの住民は、否応無く住み慣れた家や家族と別れることとなり、今でも、住み慣れた町や村から遠く離れての避難生活が続いています。

被災地から遠く離れた本学でも、学生たちに出来ることがありました。その一つが、遠隔情報支援システムによる授業支援です。障がい学生支援に携わる日ごろの活動成果を活かし、被災したいくつかの大学で学ぶ聴覚障がい学生へリアルタイムで通訳します。これは、筑波技術大学が開発したシステムを活用したものですが、その主な担い手となったのが、実際のパソコン入力者である学生たちでした。本誌で後ほどくわしく紹介します。

人知を超える津波被害や、科学技術の粋を集めたはずの原発の想定外の事故を見て、自然の脅威、および人間存在の小ささを感じた人も多いと思います。その一方で、家族や友人、隣人との絆、世界中の見も知らぬ人々からの暖かい支援など、普段は気づきにくい人の優しさについて、その有難みを改めて感じた人も多かったものと思われます。

このような人と人との絆や支援の環の広がりの背景にあるのは、われわれが日々携わる教育における障がい学生支援の取組みを支えている人々の気持ちと同じものです。それは、さしあたって優しさとしか呼びようのない、「あまねき」人の心です。

本年度は、この他、日本学生支援機構（JASSO）の拠点校として地域ブロック別シンポジウムを開催し、大学等高等教育機関における教育の質保障の問題や高大連携、企業等社会との連携、キャリア形成と就職支援まで、多岐にわたる問題を考える機会とすることができました。

本学は、本年度に起こったさまざまな出来事や取組みを踏まえ、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet − Japan）、JASSOなどの関係諸機関との連携をさらに密にしながら、これからも、障がい学生支援の取組みを進めてまいります。

「あまねく」第２号の発刊により、学内外の障がい支援に携わる皆様や教職員、学生、そして一般市民の方々に、少しでも障害に関する理解を深めていただき、支援の環を広げる一助となることを切に願っています。

目　次 CONTENTS

障がい学生支援広報誌「あまねく」第2号発刊に寄せて …… 02

東日本大震災復興支援　～同志社大学からのエール～
―東北地区大学への遠隔情報保障支援の取組み― …… 04

日本学生支援機構（JASSO）の障がい学生支援拠点として
平成23年度障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウム開催 …… 06

教育支援事業　2009～2010
日本学生支援機構　障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業
～理工学系大学院における聴覚障がい学生の支援について～ …… 08

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet−Japan）の連携大学として
第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムへの参加 …… 10

平成23年度 障害学生支援大学長連絡会議の開催 …… 11

《2011年度の活動紹介》

複合領域科目「こころのバリアフリー」を考える
―共に生きる社会をめざして― …… 12

Challengedキャンプ2011 …… 13

2011年度　障がい学生支援制度学期末懇談会 …… 14

教職員研修会 …… 16

学生の活動について …… 17

《障がい学生支援コーディネーターの活動について》

障がい学生支援コーディネーター養成研修会（試行版）開催
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet−Japan）コーディネーター連携事業 …… 20

〈他大学への協力〉岡山理科大学での養成講座
―聴覚障がい学生支援の取組み― …… 21

聴覚障害者のための字幕付与技術シンポジウム2011 …… 21

2011年度障がい学生支援室年間スケジュール …… 22

同志社大学障がい学生支援室について …… 23

東日本大震災復興支援　～同志社大学からのエール～
―東北地区大学への遠隔情報保障支援の取組み―

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、多大な被害により、多くの方々が犠牲となった。中でも被災地域には聴覚に障害のある方々も多数居住していたものと考えられ、災害時の避難警報や誘導アナウンスもよくわからない状況にあったのではないかと心が痛む。また、震災後の避難生活でも、ラジオやテレビの音情報が十分に入らない中、不安な日々を過ごしていたのではないだろうか。

そのような状況の中、同志社大学が連携校として所属する「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）」は、被災大学に在籍している聴覚に障害のある学生が安心して新学期を迎えられるよう遠隔情報保障技術を用いて全国の大学が授業支援を行うことを計画した。

同志社大学は、PEPNet-Japanからの協力要請を受け、直ちに支援を決定した。障がい学生支援室スタッフと学生サポートスタッフが筑波技術大学から遠隔情報保障システムの技術講習を受け、被災大学への遠隔授業支援を開始したのは、全国の大学に先駆けて、5月6日の連休明けであった。

支援利用大学として、宮城教育大学、東北福祉大学、東北生活文化大学、宮城学院女子大学の４校が登録され、これらの大学に在籍する聴覚障がい学生は合計17名であり、うち11名の学生が遠隔情報保障による支援を受けることとなった。

5月からの約9ヶ月間、遠く離れた教室から届く講義の音だけを頼りに、素晴らしいチームワークと高いスキルでやりとげた学生スタッフは大学の誇りであり感謝している。

本学の障がい学生支援室スタッフ並びに学生サポートスタッフたちの活動を紹介することで、災害時の支援体制や全国の大学における障がい学生支援の取組みのさらなる展開、充実の参考としていただければ幸いである。

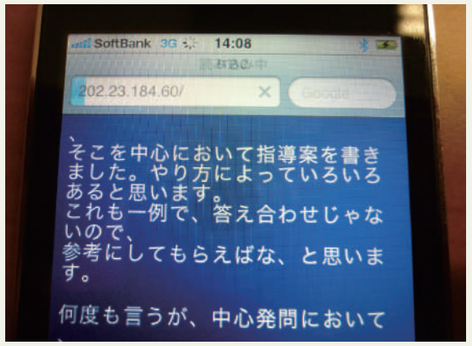
実際の支援について（支援担当コーディネーターから）

春学期の間、全国の支援大学で支援を提供した授業時間は、週間計20コマ（30時間）、延べ200コマ（300時間）以上の授業に支援を行った。また、支援に関わった学生スタッフの数は、延べ300名に及び実数でも80名近くの学生が本支援に参加した。

そのうち同志社大学は、支援利用大学３校に、春学期は週に８コマ（12時間）、計96コマ（144時間）、秋学期は週３コマ（4.5時間）、計26コマ（39時間）という全体の約半数を、約20名の学生サポートスタッフが担当した。

実際の派遣調整は、大変苦労するものであった。まず、システム・機材に関する研修会を数回行い、授業などにより参加できなかったスタッフには個別に指導し、設定や接続の仕方を覚えてもらった。一番苦慮したのは、東北の支援利用３校と本学では講義時間が違うため、２コマ空いている学生にしか活動してもらえないことだった。不具合やトラブルが発生したときのために、1コマ３名体制で支援することが理想であったが、スタッフの確保が叶わず２名体制で対応することもあった。また、音声のみの通訳のため、学内講義のパソコン通訳より高い技術と相当の集中力が必要なため、パソコン通訳に不慣れな学生スタッフには荷が重く、何度かスタッフの変更が必要であった。

（筑波技術大学による技術研修会）



また、支援当初は、音声が聞こえない、文字がうつらない、雑音が入り先生の声が聞こえないなどトラブルも多かった。秋学期に入ると、担当学生スタッフも東北の利用学生も互いにシステムに慣れ、トラブルは激減した。

通訳中は通訳に集中するため約700km以上も離れた地への遠隔支援だということを忘れがちだが、講義中に余震が起こるなど、改めて被災地であることを実感する場面もあった。学内のパソコン通訳とは違い、利用学生との交流がない寂しさもあったが、講義開始前や講義後に利用学生から「お願いします」「本日もありがとうございました」などのメールを受取り、それがうれしかったという声もあった。

12月20日（火）には、この遠隔支援も含めた東北地区大学支援プロジェクトの報告会が東北福祉大学で開催され、支援を受けた利用大学の障がい学生、サポート学生など４０名が集まった。その遠隔情報保障も本学が担当し、Skypeで現地とテレビ電話をつなぎ、東北地区の大学の学生の質問に答えるなど、交流も行った。

本システムを利用した聴覚障がい学生からは、「想像以上にトラブルもなく、落ち着いて講義を受けることができた。支援学生の皆さんに非常に感謝している。」「このような情報保障支援が被災した大学だけでなく、全国に広まって定着すればよいことだと感じた。」などの感想をいただいた。

今回のような大規模な災害時における緊急支援体制、特に大学間の相互支援の取組みは、現在、大学の聴覚障がい学生支援が抱える慢性的な支援学生の不足や、大学間の支援体制の差異といった問題に対するひとつの解決策としても利用できるのではないだろうか。東日本大震災をきっかけに緊急対応的に広がった取組みではあるが、今後こうした活動が普及・拡大していくことに期待したい。

注）大学の授業時間は1コマ=90分である。

学生の声

神学部神学科4年次生　渡邉 大輝

私は、主に東北生活文化大学の「美学」の授業の講義保障を担当しました。やはり、学内で行っているパソコン通訳と遠隔支援では、いくつも違いがありました。

まず、一番大きな違いとしては、使用する機材の違いがあげられます。通常ならパソコン2台で済む所を、さらに通信用のパソコンや携帯電話、複数人で受話音声を聴くための機材も必要になるため、事前の準備は通常のパソコン通訳より多く、慣れるまでは講義が始まる30分前に集合をしていました。

多くの機材を使うため、トラブルも普段より多くありました。まだ支援を受ける側・行う側が慣れていない頃は、接続がうまくいかず、音声が不明瞭になってしまい、講義中ずっと「水の底で聞こえてくるような音声」を首をひねりながら通訳するといった事もありました。その後、お互いが慣れてきた頃に、今度は、先生のマイクの電池が切れてしまう事もありました。なので、普段よりシステム自体についての確認が必要になると思います。

次に、実際の通訳についてですが、講義が行われる教室に居るわけではないので、ヘッドホンからの音声情報のみで、視覚情報を得られない点に最大の違いを感じました。板書を見る事は出来ない、パワーポイントも見られないという状況では、普段の支援より集中力が必要だったと感じます。

教室に居れば、たとえば「（板書参照）」と打ったり、配布された資料の読み上げ部分を指差したりという方法もあるのですが、それが出来ないので、とにかく聞こえてくる音声を文字に起こしていくという作業になります。また、同志社大学側でパソコンがフリーズした事があり、遠隔地のため、その状況をすぐに伝えられなかったという事もありました。

また、ネットを介しているので、先生の発話からのタイムラグが、普段の講義より、より大きいのではないかとも思いました。

以上のように、難点は少なくないのですが、遠隔で通訳が行えるシステムというのは大きな可能性を持っていると思います。実は、支援を受けていた利用学生の顔も知らないままなのですが、講義が終わる毎に「ありがとうございました」とメールをくださり、それが励みにもなりました。

私は、大学の講義の関係もあり、被災された実地へ向かい、ボランティア等を行う事は出来なかったのですが、自分のスキルを使って、遠隔でも支援が出来る事をありがたく思っています。今後、東北地域がいち早く復興し、大学における障がい学生支援制度も、元の状態、あるいはそれ以上の体制に整っていく事を願っています。

日本学生支援機構（JASSO）の障がい学生支援拠点校として 平成23年度障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウム開催

日本学生支援機構（JASSO）の障がい学生支援拠点校として、9月16日（金）近畿ブロックのシンポジウムを寒梅館ハーディホールにて開催した。

本シンポジウムでは、テーマを「障がい学生の能力を最大限活かす高等教育支援」とし、大学等高等教育機関における障がい学生支援、特に授業の質的保障に関る課題や問題点について深く突っ込んだ議論を展開した。

日本学生支援機構の平野俊彦学生生活部長から日本学生支援機構の取組みや支援方針などを含めたご挨拶のあと、開催校である本学を代表して、龍城正明副学長・学生支援機構長から、近年の障がいのある大学進学者の着実な増加傾向や大学における授業保障の効果的方法や支援スタッフ養成などさまざまな課題の指摘を行い、本シンポジウムでは大学教育の原点に立ち戻り、大学における障がい学生支援、教育のあり方について考える機会にしたいとの挨拶を行った。

また、このようなテーマでのシンポジウム開催にあたり、課題提起者及びパネリストとして、高大連携の観点から京都府立山城高等学校の櫻井秀樹氏を、また、社会との連携の観点からパナソニック電工株式会社人事部の星野和也氏を迎え、幅広い観点からの話題提供を行った。

櫻井氏から、「高等学校の聴覚障害支援の現状と課題-山城高等学校を例にして-」と題して、高校教育の現場における聴覚障害生徒に対する授業支援や進学指導などの状況と大学に対する要望などが説明された。続いて、大学教育の観点から、本学の真銅正宏学生支援センター所長から「大学等高等教育機関における障がい学生支援について−同志社大学での実践をもとに−」と題して、主に6つの課題があげられた。いわく、①ゼミなど双方向性の授業支援、②専門科目、語学の授業支援、③理系の実験、大学院での研究レベルでの支援、④発達障害の学生への支援、⑤障害学生のキャリア支援、⑥大学の教育理念と障害学生支援—どのような人材を育成し社会へ送りだすのか—、また学生の支援と自立について説明を行った。

最後に、企業の立場から星野氏が「パナソニック電工の障がい社員定着管理活動と求める人材」と題して、社会の現場が求める人材（障がいのある社員）について説明があった。

第二部の基調講演では、聴覚障害を乗り越えて弁護士として活躍されている田門浩氏から「障害学生修学支援ネットワーク事業に期待すること−私の体験から−」と題して、東京大学法学部入学後、法律の専門用語を手話通訳者の協力者とともに、ひとつひとつ手話に翻訳していきながら学んだという貴重なエピソードなどが披露された。

基調講演のあと引き続き行われたパネルディスカッションでは、白澤麻弓筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授がコーディネーターを努め、各パネリストを交えて活発な議論を展開した。

白澤コーディネータからの提案により、課題提起の簡単な振り返りと、それをもとに今、障害学生支援に必要なこと、さらに一段バージョンアップさせるためにやらなければならない取組みとは何かについて議論を展開した。

さまざまな観点からの議論の中で、障害学生に対する「支援」と「自立」の調和、ひとつの大学だけでなく日本学生支援機構（JASSO）を中心に全国的な支援の取組み、仕組みの構築、また、最近のIT技術の進歩による支援体制の多様化とそれを使いこなす学生の育成など多岐にわたる論点があげられた。最後に、白澤コーディネーターが大学等高等教育における支援の質を高めるのは障害学生自身であり、高校、大学など教育現場では、自ら支援やリソースをつくりだす障害学生を育てて行きたいと締めくくった。

（課題提起1　京都府立山城高等学校　櫻井秀樹氏）

（課題提起2　同志社大学学生支援センター　真銅正宏氏）

（課題提起3　パナソニック電工株式会社　星野和也氏）

シンポジウムの最後のプログラムとなるテーマ別分科会は、新町校舎の臨光館に場所を移し、分科会①では、白澤座長による「大学等高等教育における聴覚障害支援に関する諸問題」を、分科会②では、龍城座長による「大学等高等教育における障害支援に関する諸問題（聴覚障害以外の障害）」を、そして分科会③は、真銅座長による「障害学生に対するキャリア形成、就労支援の現状と課題」のテーマで活発な意見交換を行った。

いずれの分科会も大学関係者に加えて、高等学校、企業関係者、官公庁の担当者など、多くの参加者が東京など近畿圏外からも集い、充実した研修会となった。

なお、本シンポジウムの成果は、日本学生支援機構（JASSO）から報告書にまとめられ、全国の大学、関係諸機関へ配布される。

■地域連携シンポジウムプログラム

09:30	受付開始
10:00	主催者挨拶　日本学生支援機構学生生活部長　平野 俊彦氏 同志社大学副学長　龍城 正明氏（学生支援機構長）
10:20	行政説明「障害のある学生の修学支援状況」 日本学生支援機構学生生活部特別支援課長　田中 久仁彦氏
10:50	課題提起
	①高等学校の聴覚障害支援の現状と課題-山城高等学校を例にして- （発題:京都府立山城高等学校教諭-聴覚障害教育部長　櫻井 秀樹氏）
	②大学等高等教育における障がい学生支援について -同志社大学での実践をもとに- （発題:同志社大学学生支援センター所長　真銅 正宏氏）
	③パナソニック電工の障がい社員定着管理活動と求める人材 （発題:パナソニック電工株式会社人事部　星野　和也氏）
12:30	昼食
13:40	シンポジウム開始 基調講演　講師　田門 浩弁護士（ろう者） 「障害学生修学支援ネットワーク事業に期待すること−私の体験から−」
14:30	パネルディスカッション 「障害学生の能力を最大限に活かす高等教育支援とは」 コーディネーター:筑波技術大学准教授　白澤 麻弓氏 パネリスト:平野俊彦氏、田門浩氏、星野和也氏、櫻井秀樹氏、真銅正宏氏
16:00	分科会
	①大学等高等教育における聴覚障害支援に関する諸問題
	②大学等高等教育における障害（聴覚以外）学生支援に関する諸問題
	③障害学生に対するキャリア形成、就労支援の現状と課題

（田門浩氏による基調講演）

（パネルディスカッション）

（分科会 1）

（分科会 2）

（分科会 3）

教育支援事業　2009～2010

日本学生支援機構　障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業
～理工学系大学院における聴覚障がい学生の支援について～

本学は、2009年度から2010年度にかけて日本学生支援機構から「障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業」を受託し、事業テーマ「理工学系大学院における聴覚障がい学生の支援について」に関する調査研究を行った。

この研究の目的は近年、各大学において聴覚障がい学生の支援の取組みが進んできているが、実験・実習が行われる医学系・薬学系はもとより、理工学系における情報アクセシビリティの体制について、とりわけ大学院においては未整備である。本学の大学院に在籍していた聴覚障がい学生の支援を通して、支援体制の向上や課題の解決策について探ることとした。

対象の大学院生は、同志社大学大学院工学研究科機械工学専攻（博士前期課程）1年次生の奥村慎平君で、聴覚に障害のある学生である。

奥村君は、製造業の工場における環境負荷の低減を目指した「コンパクト5節リンクロボットを用いた光学部品のみがき作業動作に関する研究」を遂行している。動作の解析、実験装置の設計製作、ロボットを用いた実験など、機械工学において基本となるプロセスを網羅した内容である。

本研究に使用したロボットは卓上に設置可能なサイズであるため、実験中も動作中の机の振動などを感じ取ることが可能で、動作の安定性などに関しても十分に考察を遂行していた。またセンサーで振動を検出、その出力波形と感じた振動を比較して、その感受性を向上して考察に活用していた。したがって最新のセンサーを配置することで、音の種類が判別できない点も十分に克服して考察の遂行が可能であることを実証できたと思われる。

通常講義においては、ノートパソコンを利用したパソコン通訳にて情報保障を実施した。大学院の講義は『～特論』とつくことが多くなり、内容もその分野に特化した専門的なものになるかと予想されたが、実際には、（聞き取る分には）学部生のときの講義とほぼ同レベル、あるいはそれ以下の難易度のものが主だったようだ。したがって、当初は、専門用語にも対応できるように、同研究科の院生による情報保障が望ましいと思われたが、実際には理系の院生どころか文系の学部生であっても、それなりの通訳経験・通訳スキルがある人であれば概ね対応できた。逆に理系の院生であっても、通訳経験・スキルに乏しい人であれば、その通訳は不満の残ることになった。

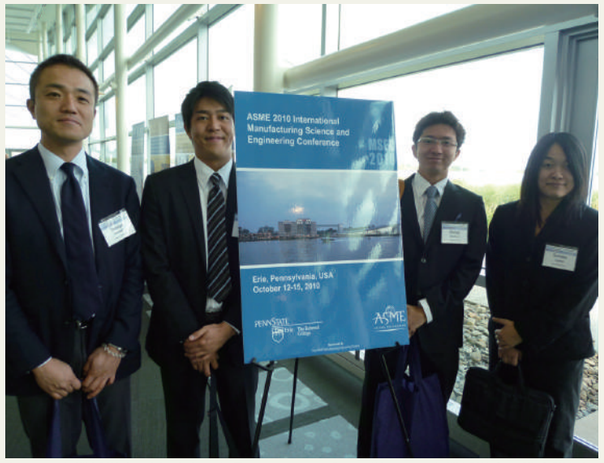
また対外的な研究発表においては、会議形式の研究会では、ホワイトボードに書き示すことにより専門的かつ細かな議論についても意思疎通する技量を向上した。ノートテイクで情報を入手することは容易であるが、情報を発信したり、双方向でやり取りする場合にはホワイトボードなどを有効に活用する手法が効果的であることを実証できたと思われる。

さらに学会発表（プレゼンテーション）など情報の発信がメインとなる場合には、スライド画面の下側に字幕を流す手法にトライして、その効果を実証できた。また学会発表のように時間が限られている場合、質疑は無理に口話だけに頼らず、情報伝達に時間を有してもノートテイクで確実に質問内容を理解してから回答する方がスムーズであることを体得した。すなわち初年度の1年間の大学院生活で経験を積み重ねた成果により、研究の進め方、会議形式の研究会、学会発表などそれぞれにおいて創意工夫がみられた。

2年目には、国際化の時代に対応するための方策について検討した。2010年10月12日～15日、アメリカペンシルベニア州で開催された、アメリカ機械学会主催の国際会議にポスター発表で参加した。英文を朗読するスピーカーソフトを用いて、ポスター会場で積極的に研究成果をPRするなどの手法を試み、小型ノートパソコンの活用が重要であることを実証した。また質疑においては、専門知識を有する大学院生をノートテイカーとして用いることで、かなりのレベルでエンジニアとしての議論も可能であることも示せた。

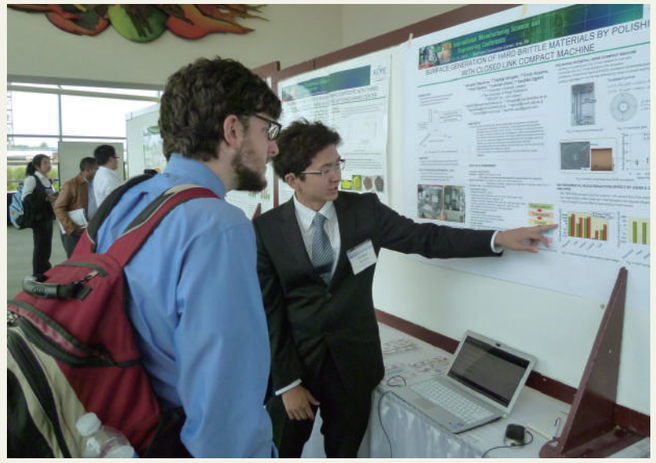
1年目の学会発表の成果は、学生に限定することなく、すべての研究発表の中から選出されるベストプレゼンテーション賞（2010年3月精密工学会春季全国講演会）も受賞し、研究内容および発表スキル（質疑応答を含む）の両面から高い評価をいただいた。2年目のアメリカにおける国際学会発表においては、国際的なレベルでも技術交流が可能であることを実証できた。ある程度の専門的な知識を有するノートテイク技術や英文朗読ソフトなどの支援を活用することで、理系技術者として世界的な視野でも第一線の研究レベルを有する実力を修得可能であることが示せた。

機械工学における研究のオリジナリティの向上だけでなく、本受託事業によるサポートで国内外で対外的な経験を重ねる機会が増大し、機械工学における研究者・技術者としての能力の向上が顕著にみられたものと思われる。



（アメリカ機械学会 /2010 年 10 月：ペンシルバニア州アメリカ機械学会国際会議場）

（アメリカ合衆国ペンシルバニア州エリー　ベイフロントコンベンションセンター）


（ポスターセッション）

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）の連携大学として 第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムへの参加

2011年11月6日（日）茨城県つくば市のつくば国際会議場にて、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNeT-Japan）主催「第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」が参加者340名を集めて開催された。

本シンポジウムは、全国の大学における支援実践に関する情報を交換するとともに、PEPNet-Japanの活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の支援体制発展に寄与することを目的としたものである。

本学からは、学生支援センター所長の真銅正宏教授と、障がい学生支援コーディネーターなど4名が参加した。

分科会4「支援の質を高める組織的実践 - 事例から学ぶ様々な取り組み -」では、話題提供者の一人として、真銅所長が同志社大学の取組みに関する発表ならびに質疑応答に応じた。

本分科会では、特色のある取組みを実施している各大学において、教育支援の「質」というものをどのように捉えているか、そしてそれをどのように組織・制度という形に表現しているかについて報告をした。そして、質というものの概念的な整理を試み、その後フロアも交えて、支援の質を高めるにはどのような方法論が考えられるか議論した。

発表では、校祖新島襄が残したことば「人一人ハ大切ナリ」を紹介し、1875年（明治8年）に同志社英学校を開校して以来、同志社では徳育の基本として、他者へのいたわり、社会的弱者への支援の姿勢を重視してきたことを説明した。

「障がい学生支援制度」の理念として、障がい学生だけでなく、支援する学生サポートスタッフの成長にも着目していること、またその特徴的な取組みとして、「ランチタイム手話」、「Challengedキャンプ」、「こころのバリアフリーを考える」などの企画を紹介した。

発表の最後に、学生サポートスタッフが、障がい学生と触れ合うことによって、逆に学びを得ることもあり、その成果を再び大学内外のコミュニティに還元させてほしいと考えていると締めくくった。

（分科会 4）

（全体会）

平成23年度 障害学生支援大学長連絡会議の開催

筑波技術大学（障害者高等教育研究支援センター）との共催により「平成２３年度障害学生支援大学長連絡会議」を会場校として開催した。

近年、障がい者の進学意欲や学習ニーズの高まり、大学における受験機会の拡大により、障がい者の大学への進学希望は年々増加傾向にあるが、「障害学生支援大学長連絡会議」では、障がい学生支援は大学の責務のひとつであるとの認識のもと、すべての学生に対してより良い修学環境や支援体制を整備、充実し、誰でもがいつでも自分の選択で学ぶことができる高等教育のユニバーサル・アクセスの実現をめざし、情報の共有化と大学間の連携、協力について協議を行っている。

今回で4回目となる大学長連絡会議は、筑波技術大学から要請があり、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）連携大学である本学を会場校として開催された。また、東日本大震災で被災を受けた宮城教育大学から提案があり、「障害のある学生に対する災害時対応の実状と今後のあり方について」をテーマとして、参加各大学長等による報告と協議を行った。

本学は、今回の震災支援として東北の被災大学に対する遠隔授業支援を行ったが、寒梅館6階で開催された本会議においても、筑波技術大学による「モバイル型遠隔情報保障システム」のデモを同館2階で実際に遠隔授業支援を担った学生スタッフと協力して実施した。

参加した宮城教育大学、群馬大学、東京学芸大学、上越教育大学、愛知教育大学、日本福祉大学、京都教育大学、同志社大学、大阪教育大学、兵庫教育大学、関西学院大学、鳴門教育大学、四国学院大学、福岡教育大学、築波技術大学の全国15大学の学長、副学長が、熱心に「モバイル型遠隔情報保障システム」を体験するとともに、災害時の障がい学生の安否確認や大学としての非常災害への備え－衛星電話の配備、非常食・毛布などの備蓄など－について情報交換を行った。

また、本学が現在、建設を進めている今出川校地のキャンパス整備事業、新校舎建設について、龍城正明副学長・学生支援機構長から大学の方針、コンセプトなどについて説明し、東畑設計事務所からユニバーサルデザインの観点に基づく設計とバリアフリー、防災設備等の説明を行った。

学長会議終了後、本学の東日本大震災による被災大学に対する遠隔授業支援室、図書館内に設置された点訳作業室、新島ルームの展示の見学を行い、盛会のうちに閉会した。

（同志社大学寒梅館６階大会議室）

複合領域科目
「こころのバリアフリー」を考える
―共に生きる社会をめざして―

2011年8月30日から9月3日までの5日間、大学コンソーシアム京都にて、同志社大学提供の複合領域科目「『こころのバリアフリー』を考える―共に生きる社会をめざして―」が開講された。1日3コマの夏期集中講義であるが、後半は天候に恵まれず、最終日の9月3日は京都市内に暴風警報が発令され、残念ながら直前で休講となった。

本科目は、大学コンソーシアム京都の単位互換制度により他大学にも開放され、本学のみならず、立命館大学、京都産業大学などの学生も数多く受講し、大学間の垣根を越えた講義・ディスカッションがなされた。3年プログラムのこの科目は、昨年度で一旦プログラムを終え、今年度新たな科目としてバージョンアップしてスタートした。

本科目が目的とするところは「コミュニケーションのバリアフリー」をキーワードに、障がい学生とそれを支援するスタッフ双方の気付きに着目しながら、自律的な成長の実現を目指すことにある。講義全体としては、

■バリアを知る(meet)
■バリアと出会う(face)
■バリアと向き合う(experience)
■バリアとつながる(share)
■バリアを超える(realize)」

の5部構成になっており、全科目をコーディネートされた同志社大学社会学部の空閑浩人教授の講義を皮切りに登録者55名（うち、同志社大学生33名）に対して展開された。

前半では、主として社会福祉の視点から障害とは何かについて考え、理解を深めた。始めに、空閑浩人教授ご自身の障がい者施設での勤務経験から、バリアフリーを考えることは、障がい者との間だけにある問題ではないことを学び、全講義を通して、たとえ明確な答えがなくとも「自分なりの答え」を探していくことの大切さについて学んだ。また、一人ひとりが安定かつ幸せな暮らしができる社会とはどのような社会なのか、あるいはそれを考えること自体が社会福祉の実現に繋がってゆくという意識が受講生に芽生えはじめたように思う。障がい学生支援室の担当講義では、ガイドヘルプや車椅子介助といった支援をする側、またアイマスクや車椅子を用いた支援を受ける側の両体験を行い、体験を通して気付いたことをメモにとり、日常生活の中で危険を感じる場面や、支援者に気付いて欲しいことが何なのかについて、具体的な意見を共有した。

後半、地域社会で障がい者支援に従事する方や、企業で勤務する障害のある方、また障害者スポーツの分野でご活躍の方をゲストスピーカーに招き、バリアと向き合う視点を意識し、ディスカッションを重ねた。お互いが率直に感じた思いや意見を交わす中で、障害がある当事者の学生と、そうでない学生との間で気持ちのズレが生じた部分もあった。お互いが相手の気持ちに触れ、向き合い、本当のバリアは物理的なものではなく、心の中にあるというのではないかという結論に繋がっていった。最終日が休講となったことで、「バリアを超える」ところまで展開が出来なかったのが残念だったが、全体を通して受講生がそれぞれの「自分のこころ」に向き合い、真剣に考える姿勢を見られたことが、今年度の成果であろう。

■こころのバリアフリーを考えるカリキュラム

実施回	内容
第1日目	8月30日(火)【バリアを知る(meet)】
	■第1講／(9:00～10:30)【講義】 空閑 浩人 バリアフリーとノーマライゼーション(概論) ■第2講／(10:40～12:10)【講義･体験】 真銅 正宏 モコゲームを通じて､聴覚障がい者への理解を深める (ゲストスピーカー:NPOモコクラブ代表･愛媛大学教育学部非常勤講師 原田 美藤) ■第3講／(13:00～14:30)【講義･体験】 真銅 正宏 モコゲームを通じて､聴覚障がい者への理解を深める (ゲストスピーカー:NPOモコクラブ代表･愛媛大学教育学部非常勤講師 原田 美藤)
第2日目	8月31日(水)【バリアと出会う(face)】
	■第4講／(9:00～10:30)【体験】 真銅 正宏 障害全般についておよび障がい者について体験を通して考える (車椅子･アイマスク体験､ガイドヘルプ体験) ■第5講／(10:40～12:10)【体験】 真銅 正宏 障害全般についておよび障がい者について体験を通して考える (車椅子･アイマスク体験､ガイドヘルプ体験) ■第6講／(13:00～14:30)【討論】 空閑 浩人 「バリアとは何か?」をテーマとしてグループディスカッション
第3日目	9月1日(木)【バリアと向き合う(experience)】
	■第7講／(9:00～10:30)【討論】 真銅 正宏 地域社会と障がい者支援(1)－各々の現場から－ (ゲストスピーカー:(社福)全国手話研修センター　事務局長 小出 新一) (ゲストスピーカー:(社福)京都ライトハウス　情報ステーション所長 田中 正和) (ゲストスピーカー:京都市聴覚言語障害センター 浅井 ひとみ) ■第8講／(10:40～12:10)【討論】 真銅 正宏 地域社会と障がい者支援(2)－ゲストスピーカーを交えてのクロストーク－ ■第9講／(13:00～14:30)【討論】 真銅 正宏　空閑 浩人 「地域社会における障がい者について」をテーマとしてのグループディスカッション
第4日目	9月2日(金)【バリアとつながる(share)】
	■第10講／(9:00～10:30)【講義】 日下部 隆則 障害で阻まれる生活､障害を越えるための視点　－障がい者と仕事－ ■第11講／(10:40～12:10)【講義】 竹田 正樹 障害が育む文化　－障がい者とスポーツ－ (ゲストスピーカー:パラリンピック金メダリスト(予定)) ■第12講／(13:00～14:30)【討論】 日下部 隆則 「真のバリアフリーにむけて必要なこと」をテーマとしてグループディスカッション
第5日目	9月3日(土)【バリアを超える(realize)】
	■第13講／(9:00～10:30)【講義と討論】 真銅 正宏　空閑 浩人 「自分の中の気づきや変化」､「心のバリアを取り除く」などをテーマとしての グループディスカッション ■第14講／(10:40～12:10)【講義と討論】 真銅 正宏　空閑 浩人 「自分の中の気づきや変化」､「心のバリアを取り除く」などをテーマとしての グループディスカッション ■第15講／(13:00～14:30)【報告会】 真銅 正宏　空閑 浩人 最終報告会　－グループ別発表－

Challengedキャンプ2011

今や毎年恒例となっている障がい学生支援室主催のChallengedキャンプ。今年度は9月8日（木）～10日（土）、昨年に引き続き、石川能登千里浜で開催した。

このキャンプでは、障がい学生と健常学生が2泊3日寝食を共にし、『音がない･光がない･身体の自由がきかない』といった障害疑似体験（以下、障害体験）を通して心のバリアにふれ、気づきを得て持ち帰る。キャンプには、28名の参加者に学生4名のキャンプスタッフ、全学共通教養教育センター日下部隆則講師、障がい学生支援コーディネーター3名が加わり、総勢36名で、充実したプログラムを遂行した。

初日、今出川キャンパスに集合した一同は、固い表情で班ごとに分かれた。各班で障害体験をしながら、今出川キャンパスを出発し、公共交通機関を利用して京田辺キャンパスまで移動。音がないことによる孤立、光がないことによる恐怖、身体の自由がきかないことによる苛立ち、そして、それらの体験者の気持ちにまだ気づけない介助者は、通常1時間程度で到着する京田辺キャンパスまで、午前中いっぱいを費やした。一行は、汗のほとばしる中、休む間もなくバスに乗り込み石川能登を目指した。

宿舎到着後は、恒例の暗闇の晩餐である。慣れない介助者の誘導を頼りに、アイマスク体験者が手探りで器を探し、こぼしたおかずをひろう。聴覚に障害のある参加学生は、アイマスクをつけることで盲ろうの状態となった。「たくさん食べたねと言われても、量や味を感じ取ることができなかった」、「視覚も聴覚も閉ざされた環境ではコミュニケーションが取れず、『食べられたらいいや』という投げやりな気持ちになった」など、ため息と共に心の中の意見が飛び出した。その夜、介助者がどこまで手を出すべきか、それぞれの立場や体験から相手との距離の取り方や見えないバリアについて、意見をシェアした。

2日目は、キャンプスタッフ企画の障害体験を実施。午前は孤立体験、午後に障害者スポーツを体験した。聴覚と視覚情報が閉ざされた中での移動体験は、体験者に大きな不安や孤立感を与えたが、一方で介助者の存在の大きさを知ることとなった。また、障害者スポーツ体験では、工夫や協力次第で障害の程度やその有無に関係なく全員が楽しめることを体感した。コミュニケーションをとることが難しい状況で、「良かれと思ってやることが実際には喜ばれないこともある」、「障がい者自身も手助けできる可能性、喜びがあることを知った」など、参加者は2日間を通して心の奥にある、その何かに気付くきっかけを得、語りあった。

最終日、クロージングにあたり、日下部隆則講師からは、次のメッセージをいただいた。

「このキャンプで、僕が毎年すごいと思うのは、参加者のアクティブリスニング、つまり傾聴力です。コミュニケーションの本質は『人の話を聞く』ところから始まると思います。3日間何を考えてどんな経験をしたのか、その経験をどう活かしていこうとするのか。キャンプは今日ここで終わるのではなく、単なる気付きの場なのです。気付いたことを君たちの将来にどう活かしていくのか。そういうことを考えるためにここに来たのです」心に沁みるメッセージを胸に、能登千里浜を後に帰路についた。

■Challengedキャンプのプログラム

行き先	石川県羽咋市　能登千里浜	
宿泊先	休暇村　能登千里浜	
期　間	2010年9月8日(木)～2010年9月10日(土)	
月　日	スケジュール	
1日目 9月8日(木)	09:30	今出川校地　寒梅館1階西側奥和室に集合 参加者自己紹介、班分けなど
	10:20	京田辺へ移動(障害体験①をしながら順次移動)
	13:00	京田辺出発→移動(大型バス･車内昼食)
	17:30	宿泊先到着
	18:00	シェアリング･ミーティング
	19:00	夕食(ブラインド体験I)
	20:00	ミーティング
	21:00	入浴後自由時間
2日目 9月9日(金)	07:30	朝食(ブラインド体験II)
	09:00	ミーティング
	09:30	障害体験②(孤立体験)
	11:00	グループワーク
	12:30	昼食
	13:30	障害体験③　体育館へ移動
	14:00	体育館到着､準備･説明
	14:15	障害者スポーツ開始(15:45迄)
	16:10	体育館出発
	16:30	ミーティング･グループワーク
	18:00	BBQ準備(体験なし)後　夕食
	20:00	フリータイム
3日目 9月10日(土)	07:30	朝食(体験なし　食事は自由)
	08:50	ホール集合
	09:00	クロージング
	11:30	休暇村出発
	12:30	高速道路サービスエリアで昼食
	18:00	京田辺校地(京都駅･今出川校地)到着

2011年度 障がい学生支援制度学期末懇談会

障がい学生支援室では、毎年、障がい学生支援制度の利用学生・サポートスタッフ・教職員を中心に、支援活動における個々のケースについての意見交換を通じて制度の充実を図ると同時に、利用学生とサポートスタッフなどの交流を深めることを目的として、春学期末と秋学期末の2回、懇談会を行っている。

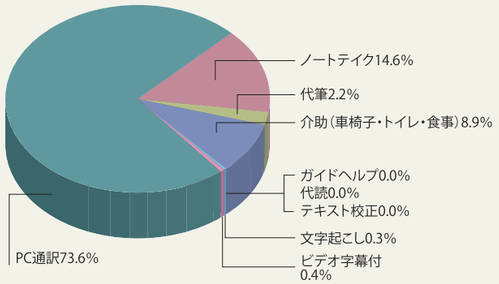
今年度は、2011年7月16日（土）京田辺校地知真館3号館114番教室（TC3-114）にて春学期末懇談会が、2011年12月24日（土）今出川校地至誠館32番教室（S32）にて秋学期末懇談会が開催された。

＜春学期末懇談会＞

まずはじめに、学生支援センター所長の真銅正宏教授より、日々のサポート活動への感謝の言葉と、東日本大震災による被災大学への情報支援について、他大学・機関より大変感謝されているとのお話をいただき、一同、これからもさらに頑張っていこうという気持ちで懇談にあたった。懇談のテーマは、前回の懇談会でのアンケート結果をもとに、「障がい学生支援制度の周知」「支援の質の向上」という2つを設定し、複数名の学生から課題提起をしてもらった上で、グループごとに話しあってもらった。学生達自身から実際の事例に基づいた課題提起をしてもらった事や、各グループに2名配置したファシリテーター役の学生が進行役を担ってくれた事もあり、各グループともに盛んに意見が交わされ、前回よりもディスカッションの時間を延ばしたにもかかわらず、まだまだ時間が足りないという状況であった。

終盤の発表では、周知方法として「ローム記念館劇場空間の大型スクリーンで流す、大学のパソコンの立ち上げ画面に表示する」「最初の講義で先生にご挨拶をする、パソコンの背に情報保障実施中とシールを貼る」「先生から講義の最初もしくは最後の時間をいただいてアナウンスを行う」など様々な意見が出た。また、質の向上についても、「現在の支援は完全ではないと意識し、改善点を考える」「仲良くなることは大事であるが、馴れ合いにならないようけじめが大切である」「教員の方も含めたフィードバックの場を作る」「利用学生のための情報保障であるため、言いにくくとも利用学生から意見を言ってもらい、情報交換を行うことが必要である」など多くの意見が出た。

■2011年度　春学期活動内容



■2011年度　春学期サポートスタッフ数（単位:人）

		登録者数	活動者数
	学部生	245	93
	院　生	8	5
	留学生	4	1
学生スタッフ		257	99
一般スタッフ		30	2
スタッフ総計		287	101

＜秋学期末懇談会＞

テーマ設定や準備、運営について学生サポートスタッフの協力を得るという初めての試みを行った。学生サポートスタッフが設定したテーマは「障がい学生支援におけるサポートスタッフの位置付けについて−サポート活動やイベント参加者の層をより厚くするためにはどうすれば良いか−」というもので、グループごとに主に筆談を用いて話し合いが行われた。学生サポートスタッフが入念に事前準備をしてくれたことや、前回同様各グループに2名配置されたファシリテーター役の学生サポートスタッフが進行役を担ってくれたこともあり、各グループとも前回に負けず劣らず盛んに意見が交わされ、今回も議論の時間が足りないという結果になった。

終盤の発表では、

■スキルに自信を付け、モチベーションを上げるためにも、派遣より前に仮派遣（本来の障がい学生・サポートスタッフのチームとは別に、もう1組仮派遣のサポートスタッフのみのチームを講義に派遣し、実際に通訳してみる）を行ってはどうか

■先輩と後輩を組ませて指導してもらう、ブラザー制度を発足してはどうか

■イベントの呼び掛けには、1人での参加もOKと明記して、知人がいないと参加しにくいという意識を和らげてはどうか

など様々な意見が出た。

春秋ともに、さっそく実施できそうなことから、これからの課題となることまで、多くの意見が発表され、大変有意義な時間となった。春学期末懇談会では文化情報学部の西倉実季助教が、秋学期末懇談会では文化情報学部の星 英仁准教授が懇談にご参加くださったことも、学生にとっては大変良い刺激になった。

また、秋学期懇談会終了後には、アーモスト館ゲストハウスに場所を移して恒例の交流会が行われた。寒さも厳しくなる中、授業などで懇談会に参加できなかった学生も駆け付けてくれ、和やかで楽しい雰囲気のもと、支援活動を通して繋がり合う学生たちが、普段聞けないこと、聞きたかったことを話し合いながら絆を強めた。交流会半ばには、真銅正宏学生支援センター所長より、今年度に卒業する学生サポートスタッフ及び利用学生への感謝の言葉とともに記念の品が手渡され、また、参加者全員からお礼メッセージの寄せ書きが贈られた。

＜利用学生との懇談＞

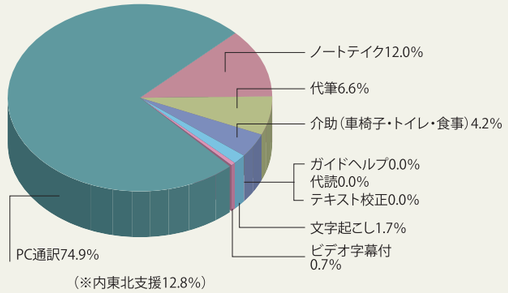
各学期の懇談会当日には、利用学生と障がい学生支援室だけでの懇談会も開催しているが、今年度は特に「障がい学生に対するキャリア形成、就職活動支援」のテーマでキャリアセンターのスタッフも参加しての懇談を行った。

利用学生からは、普段の授業での要望や意見とあわせて、将来の夢の実現や実社会での活躍に向けて、学生時代にどのような勉強や準備をすればよいのかなど多くの質問と意見が出された。

また、秋の懇談では実際に就職活動を経験した学生から、「生まれて初めて自分が障がい者なんだと感じた」という切実な話もあった。学生たちからは、企業の情報だけでなく、教職や公務員などいろいろな情報が欲しいとの声があり、大学としてもこれからの課題は大きいと実感した。

障がい学生支援室では、学内外の関係諸機関、部署などとも連携し、質の高い授業保障のための取組みとあわせて、利用学生（障がい学生）のニーズにあったキャリア形成と就職支援の取組みにも力を入れていきたい。

■2011年度　秋学期活動内容



■2011年度　秋学期サポートスタッフ数（単位:人）

		登録者数	活動者数
	学部生	257	105
	院　生	8	4
	留学生	1	0
学生スタッフ		266	109
一般スタッフ		29	1
スタッフ総計		295	110

教職員研修会

2011年2月23日（木）、障がい学生支援室が毎年実施している「教職員研修会」を開催した。
当日は、群馬大学障害学生支援室副室長兼視聴覚障害担当専門教員の金澤貴之氏（群馬大学教育学部准教授）を講師にお迎えし、「障害学生が抱える困難と大学の課題～聴覚障害を中心に～」という演題で講演をいただいた。今出川校地寧静館会議室と京田辺校地交隣館多目的ルームをテレビ会議で結び、約50名の教職員が熱心に聴講した。
まず初めに、龍城正明学生支援機構長から、「最近の障害は、肢体不自由など外からみえる障害から、聴覚障害やアスペルガー症候群などの外から見えない障害への対応が求められている」との挨拶ではじまった。
講演では、1.群馬大学の障害学生支援室の組織体制、2.聴覚障害とはいかなる障害か?、3.アセスメントに基づく支援計画策定の重要性、4.分業できる専門性とできない専門性、5.支援体制の「組織化」‥まず縦、そして横、6.これからの課題、にわけて話があった。
1.では、群馬大学の支援の特色として、聴覚障害の学生には手話通訳による情報保障体制を全面的に実施していること、これは教育実習など学外での活動支援やゼミなど双方向性のコミュニケーションをとる場合に有効な方法となる。また、文字媒体の情報保障として連係入力によるPCテイクにiPhone、iPadによる字幕提示が、障害学生にとっては、教室内での支援が目立たないこと、実習などでもPC通訳が可能となりきわめて効果的な支援となるとの説明があった。
2.では、聴覚障害は意外と深いという話からはじまり、「等価情報」「裏情報へのアクセスが大変（表立って書かれない、話されない情報から疎外される）」「日本文化は察する文化、聾文化は明示の文化」など普段は気づかない示唆に富む話があった。
また、成長過程への配慮では、高校まで通常学校で学んできた学生がはじめて大学で感じる衝撃や聾学校出身者は海外の大学に来たようなもの、聴覚障害の学生はいつメンタルヘルスの問題を引き起こしてもおかしくない状況に置かれているとの指摘もなされた。
3.では、障害学生支援は最初の面談と的確な支援計画の策定が重要である。ここが杜撰だと障害学生は途中から大学へ来られなくなる可能性もある。また、最近、各大学で懸案となっている発達障害の学生対応として、群馬大学では健康支援総合センターの教員（医師）1名と障害児教育講座の教員1名の2名体制をとっているとの説明があった。
4.では、分業したほうがよい専門性として、障害が専門の教員によるアセスメント及び教育的関与と障害支援コーディネーターのような専門支援スタッフとの仕事を分けるほうが望ましい。また、専門性という観点から、仮に一人しか専門スタッフを置けない場合には、一番スキルが必要な手話通訳ができる人材をまず配置し、そのスタッフがその他の障害支援にも取組むというやり方が、逆は無理という理由からベターであると説明された。このほか、分業が可能なようにみえて実際は困難な専門的役割として、メンタルケアを挙げられた。保健管理センターと障害学生支援室との分業は単純にはできない。聴覚障害が原因となるメンタルダメージは、環境因子を改善しなければ回復しないと指摘された。
5.では、支援体制の「組織化」がテーマであったが、本学はすでに全国の大学における障害支援体制構築モデルのひとつであるとの評価をいただいた。
6.では、これからの課題として、エンパワーメントとそれを促す「場」づくりが大切との指摘がなされた。聴覚障害学生が本当の自分が出せる場が学内にあることが大切。聞こえない学生同士のネットワークや人間関係はなかなかできない。大学はそのような貴重な「場」となることができる。群馬大学では、障害学生支援室をそのような「場」と位置づけ、手話だけで会話をする機会などを設けていると紹介された。また、キャリアサポートでは、大学教育を受けた障害学生に相応しい就職先の確保、大学自体が研究職など職域開拓を、との提言をいただき講演を終えた。
　質疑応答では、大学として生活サポートまで含めてどこまで支援ができるのかという質問に対して、教職員による直接支援よりも、それを実現できる「しかけ」「しくみ」をどうつくるかが重要との説明がなされた。また、ノートテイクやPC通訳で支援がうまくできていると思い込んではだめ、新学期での友人づくり、裏情報の入手など、聴覚障害学生にとって本当に必要な支援ができるような仕組みが必要との説明は説得力があった。
　最後に、真銅正宏学生支援センター所長から、群馬大学の障害学生支援は専門の教員の関与が大きく本学との違いがある、また、本日の講演を聴いて聴覚障害学生の実態なども十分に考えた取組みが必要だと感じた、参加者のみなさんは講師からの多くの有益な指摘や提言を学内各部署に持ち帰り、日々の業務に活用してほしいとの挨拶があり、盛会のうちに終了した。

学生の活動について

積水ハウス1日インターンシップ

　8月29日に、積水ハウス株式会社での障がい学生対象1日インターンシップが開催され、7名の障がい学生が参加した。このインターンシップはキャリアセンターの主催で行われ、学生サポートスタッフがノートテイクを行った。

学生の声

文学部文化史学科2年次生
聴覚障がい学生　藪田 みゆき

私は、8月29日に開催された積水ハウス1日インターンシップに参加しました。
　まず、積水ハウスの見学施設である納得工房を訪れ、その後、車椅子の社員の方のお話を伺い、最後に企業の担当者の方との質疑応答を行いました。
納得工房の見学では、訪問企業の業務やその成果を実際に体感することができ大変良かったです。納得工房で取り扱われていた住宅関連事業だけに絞っても、「積水ハウス」と聞いて一般に思い浮べるイメージを越えた様々な業務が展開されていることが分かりました。就職活動において、相手企業が「何をしているのか」、その具体的な下調べをしておくことは大切な事であると改めて感じました。
また、社員の方から、日頃の業務内容や、障害をもって働く事についてなどの貴重なお話を伺えた事も収穫でした。
今回の1日インターンシップは、キャリアセンターと障がい学生支援室の合同企画による初のインターンシッププログラムです。そして、どちらかというと就職活動を主眼にするのではなく、就職活動に対する意識向上が目的であったとの事でした。
そのため、企業の方もお気遣い下さっていたのか、質疑応答では全体として「障害があっても就職には影響しない」「（やはり障害があると、一般社員よりも努力が必要かという質問に対して）障がい者でも健常者でも同じくらいの努力でいい」というご回答をくださいました。
また、今回は私のような聞こえない学生に対しては、障がい学生支援室からサポートスタッフの学生さんが派遣され、納得工房内での説明や社員の方のお話などを移動しつつノートテイクして下さいました。非常にありがたかったです。
しかし、これから就職活動を始めていくにあたって、必ずしもそういった配慮に恵まれる機会ばかりではないでしょう。むしろ、聞こえない学生ならば情報やコミュニケーションの面で、車椅子の学生ならば移動面で、といった大なり小なりの不自由に直面し続ける就職活動・また社会人生活であるだろうと、私たち障がい学生は実感しています。
「大丈夫だ」と言われるよりも、社会の障がい者雇用に対する厳しい実情を知った方がきっと安心できる。これが私の正直な思いです。
それは決して障害があるから壁があるのだと、悲観的になったり自暴自棄になるためではありません。現状をきちんと見据えた上で自分なら何ができるのかを考え、能動的に就職活動をしていくためです。
個人的には質疑応答の時間に積極的な質問をする事ができなかったのが心残りですが、そうした反省点を得られたことからも、今回の一日インターンシップに参加できて良かったと思います。
今後も、こういった就職活動関連の企画に積極的に参加していきたいです。

ランチタイム手話

障がい学生支援室では、開講期間中、京田辺校地で毎週火曜日に嗣業館1階学生支援センター内ラウンジで、今出川では毎週木曜日に寒梅館1階ミーティングブースAで楽しく手話でお話、勉強する場を設けている。ランチタイム（12：30-13：00）という限られた時間であるが、聞こえない学生も聞こえる学生も手話という言語を用いて、学年や学部を超えた交流をしている。

新入生歓迎会

障がい学生支援室では、5月28日に、障がい学生支援制度に登録している学生を対象に新入生歓迎会を開催した。この歓迎会は新入生と上級生が知り合う大切なきっかけとなっており、今年度も昨年度同様、学生サポートスタッフを中心に企画を行った。

学生の声

法学部法律学科2年次生
吉村 彩香

私は、いつもサポートしてもらっている利用学生なので、その分なにか手伝えることがあればと思い、新入生歓迎会のスタッフをさせていただきました。特にこの新入生歓迎会は、昨年私自身も参加したことで同級生や先輩といった知り合いを作るきっかけになったので、その時のような会にできればいいのになぁという思いで参加したのもありました。

スタッフ間の会議は大学内で集まったり、Skypeというチャットのようなものでも行われたりしました。大学内での会議では、利用学生でも内容がわかるようにと、いつもサポートスタッフとして活動してくれている方が話している内容をパソコンに打ち出してくれました。またSkypeでは電話機能ではなくチャット機能を使って会話することで、いつもより会話しやすい形になっていました。また、忙しくてなかなか会議に参加できない時もあったのですが、リーダーが会議の内容をまとめて教えてくれたので困る事はありませんでした。

当日はトラブルもなく無事に終わり、後日後輩に「楽しかったです!」と言われてとてもやりがいを感じました。また次の機会があればスタッフとして企画段階からかかわりたいなぁと思います。

学生の声

理工学部数理システム学科2年次生
山内 孝治

今年度の新入生歓迎会にはおよそ60名もの方が参加されました。その参加者の中には視覚･聴覚･肢体などの障害ある方も含まれています。そういった方たちも含めてすべての参加者に楽しんでもらいたい、ほかの方との新しいつながりを持ってもらいたいという考えでいろいろな企画を進めていきました。運営するにあたって、リーダーが1人で動くのではなく、それぞれ運営スタッフが積極的に動いていたこともあり、しっかりと準備した上で当日を迎えることができました。歓迎会当日、参加者同士が和気あいあいと過ごす様子が見られたり、新しい友人ができたとの報告を受けたりしたことは運営スタッフとして嬉しいことでした。新入生にとってこの歓迎会が、これからの支援室開催行事に積極的に参加するきっかけとなれば嬉しいです。今後、運営スタッフとして支援室の行事に関われる機会があれば、今回の運営スタッフとしての経験を活かして関わっていきたいと思います。

京田辺燭火讃美礼拝

同志社大学では、毎年クリスマスが近づくと両キャンパスでクリスマス燭火讃美礼拝が執り行われる。2011年度、京田辺では12月10日（土）に同志社新島記念講堂で、夕刻、讃美歌Ⅱ49（めさめてたたえまつれ）とともに聖歌隊が入堂し、会場が暖かく灯された。学生も手話通訳者として毎年参加している。

学生の声

心理学部心理学科1年次生
万福 尚紀

クリスマス礼拝のために手話を練習を始めたのは、講師の先輩学生と日程調整があわず、本番の10日前程でした。実のところ僕は、手話に関して全くの素人で、本当に本番に間に合うのか不安でした。しかし、2人の先輩の指導を重ねていくうちに、ぎこちないながらも形になり、本番も無事に通訳を終えることができました。この経験から、授業や課題の合間を使うことで、その時間が限られていても『何かを成し遂げられる』ということを学べたと思います。この教訓を活かし、今では、2分～3分でも時間が空いた時には、本を読んだり、英語のリスニングをしています。

障害者シンクロナイズドスイミング･フェスティバル

今年で21周年を迎える障害者シンクロナイズドスイミング･フェスティバルが、2011年5月7日から8日にかけて、京都市障害者スポーツセンターで開催された。フェスティバルでは、京都新聞社会福祉事業団(主催)からの依頼により、学生サポートスタッフがプールサイドでパソコン通訳を行った。

学生の声

法学部法律学科3年次生
小川 恵

私には初めての学外活動であり、緊張しましたが、一緒に活動した学生サポートスタッフやシンクロ･フェスティバルのスタッフの方に助けられ、パソコン通訳をやり遂げることができました。

普段活動する教室とは違う環境なので、プールサイドの湿度にパソコンが耐えられるのか不安でしたが、なんとかパソコンは無事で良かったです。

また、私たちの活動の様子を見て、「普段からやってるの?」「どんなトレーニングをするの?」などと声をかけてくださる方がいて、活動が広まってくれたことを嬉しく思いました。

学生の声

社会学部産業関係学科4年次生
宮本 健生

シンクロ･フェスティバルの会場であるプールサイドは、想像以上に暑く、そのような場所でパソコン通訳を行ったのは初めての経験で、正直なところうまくできるかとても不安でした。しかし、学生サポートスタッフがお互いにフォローし合い、大きな失敗なく成功することができました。

今回、僕が一番驚いたのは、まだまだパソコン通訳の存在を知らない人が多かったということで、たくさんの方がパソコン通訳の事を聞いてこられました。学内では当たり前だと思っていたパソコン通訳も、一歩学外に出れば、まだまだ知らない人が多く、浸透していないことを実感しました。今後も、活動を通じて、パソコン通訳やその他の通訳手段が社会に広まっていけば、と思いました。

障がい学生支援コーディネーター養成研修会（試行版）開催
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）コーディネーター連携事業

近年、大学などの高等教育機関における障がい学生支援の広がりとともに、障がい学生への支援業務を専門的に担当する、いわゆる「障がい学生支援コーディネーター」を設置する大学が増えつつあり、その存在が注目されてきた。

PEPNet-Japanでは、2007年2月より、全国の大学で障がい学生支援を担当するコーディネーター同士の連携体制を構築し、密な情報交換ができる体制を作るとともに、得られた情報を全国的に発信していくことを目的として「コーディネーター連携事業」を立ち上げた。連携大学である本学も、障がい学生支援を担う土橋恵美子コーディネーターがそのメンバーとして加わり、2010年度からは事業代表として、①コーディネーターをはじめとする障がい学生支援担当者がどのような役割を担っているのか、その業務内容を整理し、業務において求められる専門性を明らかにするとともに、②コーディネーターの養成・研修体制を構築することを新たな目的として活動してきた。そして、2011年度は、研修班リーダーとして、聴覚障害に限らず大学での障がい学生支援体制の運営を担うにあたっての基盤となる専門知識・スキルを深めていくための「コーディネーターの養成・研修カリキュラム」の作成に携わった。2012年1月21日（土）には、PEPNet-Japanコーディネーター連携事業主催により、東京秋葉原ダイビルにて『障害学生支援コーディネーター養成研修会（試行版）』が開催された。

参加者は当初の定員40名を大幅に上回る53名にのぼり、表1のとおり、1日にわたって開催された。

こうして2010年度から始まった専門職としての障がい学生支援コーディネーター養成の専門知識とスキル構築において、代表およびリーダーとして関わったことが評価され、2011年11月1日から、土橋恵美子コーディネータは、国立大学法人筑波技術大学客員研究員の受入承認を得た。今後、このカリキュラムが本格的に全国で展開されることを期待したい。

〈研修会スケジュール〉

時 間	テーマ	内 容	講 師
9:30 〜 9:50	開会式	・代表挨拶並びにコーディネーター連携事業の概要 ・本研修会の趣旨説明	
9:50 〜 10:50	「聴覚障害学生のエンパワメント」	・聴覚障害学生のエンパワメントとは ・聴覚障害学生の心理的側面 ・聴覚障害学生への効果的な働きかけ	宮城教育大学 特別支援教育講座 松﨑丈氏
	休 憩		
11:00 〜 12:00	「情報保障の実際」	・情報保障手段の使い分け ・聴覚障害学生の状況と大学内の資源活用	日本社会事業大学 聴覚障害者大学教育支援プロジェクト 岡田孝和氏 名古屋大学 学生相談総合センター 障害学生支援室 瀬戸今日子氏
12:00 〜 13:00	昼食休憩		
13:00 〜 14:00	「クレーム対応Ⅰ」	・クレームとは何か ・クレーム対応の基本手順 ・ケーススタディ	株式会社インソース 石川利江氏
	休 憩		
14:10 〜 15:10	「クレーム対応Ⅱ」		
	休 憩		
15:20 〜 16:50	「大学組織理解」	・大学組織とは ・大学職員論	広島大学 高等教育研究機関センター 本眞一氏
16:50 〜 17:70	閉会式	・今後の研修会とコーディネーター連携について ・アンケート	

〈他大学への協力〉

岡山理科大学での養成講座
―聴覚障がい学生支援の取組み―

岡山理科大学（学校法人加計学園）から、障がい学生の入学に伴い支援体制づくりに取り組むため、本学に「ノートテイク・パソコン通訳の技法」講習会講師の声がかかり、2011年11月29日（金）、障がい学生支援室の学生スタッフ2名とコーディネータ2名が岡山へ向かった。

最初に学長室へご案内いただき、波田善夫学長から、手書きとパソコン入力による情報量の違いや支援の仕組み、大学の体制等について熱心に質問があり、意見を交わした後、加計学園50周年記念事業について説明いただき、建設されたばかりの記念館を見学した。

養成講座では、最初に「障がい者とノートテイク」について岡山理科大学の西村次郎教授からお話があり、参加学生8名と教職員に同志社メンバーも加わり、一緒に「障がい」について学んでから技法の実践がスタートした。

1時間半弱の実技講習では、コーディネータが聴覚障害と情報保障の必要性、ノートテイクについて説明した後、本学の学生が講師となり、パソコン通訳の技法について実際の講義の音源を用いて実践練習をした。

これまで、学生スタッフが近畿圏の大学へ講習会講師として出向いたことはあったが、遠方からの依頼は初めてであり、学生にとっても貴重な経験の場となった。

講師をした学生スタッフから
法学部2年次生　花田 麻未

11月29日、大学の創立記念日に岡山理科大学を訪れノートテイクとパソコン通訳の講師をさせていただきました。受講してくださった岡山理科大学の学生さんは8名、岡山理科大学の職員の方も同じくらいいらっしゃいました。岡山理科大学にも障がい学生さんがたくさんいらっしゃること、その支援に動こうということで、同志社大学に講師依頼した旨を初めに聞きました。私は「自分の持っているスキルで可能なだけのノウハウを伝える」、最初はそれだけのイメージをもって講師を引き受けていましたが、実際行ってみて思ったのは、自分が与えること以上に得るものが大きかったことです。

岡山理科大学の西村教授は、芯が強いというか、信念を持っているというか、どう言葉に表現していいのかわかりませんが、とにかく素晴らしい方でした。私たちの講習前に30分程度、西村先生の講義があったのですが、「誰もが程度の差はあれ『障がい者』になるのだ。たとえば視力が衰えるといったことのように」「支援する側だって障がい者から得るものがあること、決して一方通行ではないこと」「基本は人間関係。人との付き合い、信頼関係などを学べること」など、考えさせられる内容が多くちりばめられていました。

私自身、通訳をするようになって今まで抱いていた障がい者に対するイメージは変化し、障害があるか否かなんてそんなに気にする必要のないものと思えるようになりました。障がい者と聞いただけで同情のような、また無意識に薄い壁を作って受け入れないような、そんな考えが変化したのです。

最後に、岡山理科大学でも支援体制が1日でも早く整うことを祈っています。

聴覚障害者のための字幕付与技術シンポジウム 2011
（主催：京都大学　学術情報メディアセンター）

日　時：2011年10月 1日（土）　午後1時30分〜5時30分
場　所：京都大学 学術情報メディアセンター 南館
参加者：100名ほど
通　訳：同志社大学（学生スタッフ2名の派遣、一般スタッフ2名）PSP使用。
浜本チーム（パソコン通訳のプロ、2名）
ワードワープチーム（ステノキャプショナー（字幕速記者）、6〜7名）
ASR（河原先生の音声認識、2名）

東日本大震災における東北地区大学遠隔情報保障支援に関わる本学の取組みやシステムについて、本学コーディネータが講演をした。遠隔通訳活動をした学生2名にも、通訳時のエピソードやどんな苦労があったかなどを発表してもらった。

質疑応答では、講義内容の把握についての質問や、映像も使用した遠隔通訳はどうかなど多くのご意見もいただけた。

このシンポジウムは毎年開催されており、3年前から本学のパソコン通訳学生スタッフを派遣している。

2011 年度 障がい学生支援室年間スケジュール

4月
入学式（障がいのある新入生および保護者の方へのサポート・式典通訳・学部説明会対応）
オリエンテーション期間（新入生サポート対応・スタッフ勧誘）
新入生面談
春学期　制度利用学生へのコーディネート（派遣内容確認→派遣調整→配慮依頼と派遣）
制度スタッフへのコーディネート（顔合わせ会→登録手続き→活動内容確認→派遣調整）
制度説明会・入門講座

5月
システム月次処理に合わせて実績データ表数値埋め込み作成（随時）
心のバリアフリー案（体験授業）作成
Challengedキャンプ案作成
新入生歓迎会
入門講座＆フォローアップ勉強会（5月～7月）

6月
教職員研修会

7月
春学期末試験のコーディネート
春学期末懇談会
オープンキャンパス

8月
寒梅館夏祭り
障がい学生対象　1日インターンシップ（キャリアセンターとの共催）
複合領域科目：「こころのバリアフリー」を考える（5日間集中講義）

9月
Challengedキャンプ（2泊3日）
障がい学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウム（独立行政法人日本学生支援機構と共催）
利用学生面談
秋学期　制度利用学生へのコーディネート（派遣内容確認→派遣調整→配慮依頼と派遣）
制度説明会・入門講座

10月
入門講座＆フォローアップ勉強会（10月～12月）
障害学生支援大学長連絡会議

11月
クローバー祭（同志社京田辺祭）
PEPNet-Japanシンポジウム
障がい学生対象就職ガイダンス（キャリアセンターと共催）
新年度事業計画・予算案作成

12月
クリスマス学生交流会
クリスマス礼拝手話通訳
秋学期末懇談会

1月
秋学期末試験コーディネート

2月
新年度スケジュール作成
各種パンフレットガイド作成

3月
利用学生（在学生）面談
次年度新規で制度利用者の面談（本人・保護者・学部・教務主任・支援室）
次年度スタッフ強化勉強会
卒業式（式典通訳・サポート）

「学生スタッフから一言」　文学部国文学科2年次生　辻野 夏奈子

「障がい学生の支援」。大学に入学したての頃は知らなかったことです。また、興味もありませんでした。しかし、私はいま支援制度に関わり、かつ大学卒業後もずっとそういった支援に関わっていきたいと思っています。

大袈裟な言い方ですが、1年次生と2年次生で、私の人生は変わりました。支援制度に関わり、サポートスタッフになって一番良かったと思うことは、多くの人と出会えたことです。学部、学年の違う人と支援活動を通して出会えたことで、多くの大切なものを得ることができました。それは、新しい考え方であったり、楽しい思い出であったり、真剣に話し合った時間であったり、人との出会いそのものであったり、そういう経験からしか得ることのできないものです。

1年次生の時、私は所属学部に知り合いがおらずいつも一人でいました。それを見かねた友人が、学生支援センターのランチタイム手話に誘ってくれたのが、支援制度に関わるきっかけでした。そこで手話に出会い、聴覚障害の友人に出会いました。1年次生の秋学期にサポートスタッフ登録をしましたが、本格的にサポート活動を始めたのは2年次生になってからです。春学期、秋学期ともに週に4、5コマの授業にサポートで入りました。先生の話す内容をパソコンに打ち込むのは大変な仕事です。特に、話すのが速い先生などは途中で何度も打つのが嫌になりました。けれど、内容を拾いきれず諦めかけるたびに、サポートスタッフが打ったものを読んで書きとっている利用学生の姿を見ると、絶対に投げだせない、伝えるのは私しかいないのだと気持ちを取り直すことができました。心の中でそんな戦いをしながら授業を聞くのは自分の科目では絶対にないことで、「集中して話を聞く」力と諦めない気持ちがサポートを通して培われたと思っています。利用学生はサポートスタッフを全面的に信用してパソコンの画面を見ているのだと思うと、サポートするのが自分でいいのかという不安感もありますが、学生同士で助け合って学ぶことの大切さを感じています。

利用学生もサポートスタッフも互いに授業を通して学んでいく。そこには助けてあげているという感情も、助けてもらっているという遠慮も必要ありません。自分の専攻とは違う学部の授業をサポートすることは、専門用語や内容が分からず利用学生に迷惑をかけるというリスクもありますが、未知の話を聞く面白さもあります。そうして聞きかじった知識が、思わぬ科目で役に立ったこともありました。サポートに入ることは単に講義内容を伝えるだけではなく、先生とのやり取りも含まれてきます。自分の講義では気にならなかった速さや先生の話し方の癖などが気になり、時にはパソコン通訳に配慮して頂けるようにお願いすることもあります。具体的には、板書の説明をする時に「これ」「あれ」などの指示語をあまり用いないようにしていただいたり、話すスピードを緩めていただいたりしたことがありました。どれも漫然と自分の講義だけを受けていたら気づかないことばかりです。

個性的でいろんな経験をしてきているサポートスタッフのメンバーと出会え、教え教わる仲間ができたことは、世界はこんなに広いのだと閉じこもっていた私に教えてくれました。

同志社大学障がい学生支援室について

1.本学における障がい学生支援について

同志社大学の障がい者支援は1949年に遡る。入学試験において、日本の大学で初めて点字受験の対応を開始した。1975年、点訳・墨訳担当者を配置し、試験問題の点訳を開始。1982年には学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置し、これを契機に今出川校地内建物入口スロープや自動昇降機を設置、1984年からは語学テキストの点訳業務を開始した。

1986年、京田辺キャンパスの開校にあたり、キャンパスの基本設計から全面的なバリアフリー化をはかり、図書館内には点字室や対面朗読室を設けた。

2000年3月、「障害者問題委員会」からの学長宛て答申を契機として「障がい学生支援制度」がスタートし、翌2001年に同委員会からの再答申により、講義補助から講義保障へと一段と踏み込んだサポートが開始された。この際、一部の支援で、サポートスタッフの活動を有償化した。

2002年には「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更し、学内の障がい学生の総合的相談窓口を、学生部（現在の学生支援センター障がい学生支援室）に一本化した。2004年、今出川・京田辺の両キャンパスに常勤の障がい学生支援コーディネータを配置し、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）の連携協力を開始。2006年には日本学生支援機構（JASSO）の「障がい学生就学支援ネットワーク事業」の拠点校として連携協力を開始した。

2007年にはアシスタントスタッフ（有償）とボランティアスタッフ（無償）を統一し、「サポートスタッフ」として全支援を有償化した。

2008年、「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編し、学生支援センター内に「障がい学生支援室」を設置した。

2009年秋より、事務組織上、障がい学生支援室を京田辺校地学生支援課に一元化した。

2011年には、PEPNet-Japan連携協力校として、東日本大震災により被災した大学への遠隔情報保障支援を実施した。

2.障がい学生支援室

専属の障がい学生支援コーディネータが常駐しており、障がいのある学生に対して学生サポートスタッフの協力を得て、授業保障に関わるサポートを行う。

授業保障とは、障がいのある学生が希望するすべての授業について、一般学生と同じレベルで受講できるよう保障することである。

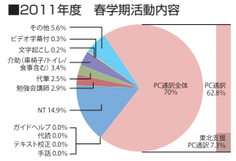
1)スタッフ

マネージメント	真銅正宏	学生支援センター所長・文学部教授
	田鍋耕三	京田辺校地学生支援課長
	宮﨑與也	京田辺校地学生支援課学生生活係長
	吉川春菜	京田辺校地学生支援課学生生活係員
コーディネータ	土橋恵美子	京田辺・今出川校地担当（手話通訳者）
	渡部由利子	京田辺校地担当
	仲兼久知枝	今出川校地担当
事務補佐員	長村香織	京田辺校地担当
	田中瞳	京田辺校地担当
	志摩祐子	今出川校地担当

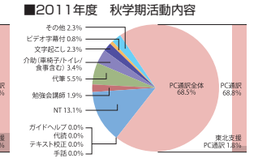
学生サポートスタッフ

2011年度秋学期は295名のサポートスタッフがいるが、そのうち266名は現役の本学学生・大学院生です。一番多いのは、聴覚障がい学生に対するPC通訳・ノートテイクです。

■2011年度　春学期活動内容



■2011年度　秋学期活動内容



支援の内容・種類

（1）聴覚障害
PC通訳、ノートテイク、手話通訳、ビデオ文字起こし、ビデオ字幕付け、ノートテイク用消耗備品の支給（ルーズリーフ、ペン）

（2）視覚障害
講義資料・試験問題などの電子データ化・拡大コピー、対面朗読、代筆、代読、ガイドヘルプ（学内移動）、点字機器・拡大読書機等の利用、点字室・対面朗読室の利用

（3）肢体不自由
代筆、車椅子介助（学内移動）、トイレ介助、食事介助、車両の入講及び駐車許可、ストレッチ用休憩室の利用

（4）内部障害
ガイドヘルプ（学内移動）、車両の入講及び駐車許可、受講時の配慮（教室の着席位置、途中入退室の許可など）

3.障がい学生の在籍状況

現在本学では90名の障がいを持った学生（発達障害を除く）が在籍しており、その内21名の学生が授業支援を受けている。

（単位:人）

	障がい学生数	障がい学生支援制度登録学生数
聴覚障害	44	7
視覚障害	7	1
肢体不自由	22	7
内部障害	13	4
重複障害	4	2
合　計	90	21

4.サポートしている週当たりの講義コマ数（2011年度秋学期）

京田辺キャンパスで約90コマ、今出川キャンパスで約10コマ（東北支援を含む）を支援している。計100コマの支援に延べ約160名の学生サポートスタッフがサポートに入っている。
※1コマ=90分

編集後記　このたび、昨年に創刊いたしました障がい学生支援広報誌『あまねく』の2号を発刊することとなりました。創刊号について、思いがけずあちこちから好評をいただいていただけに、2号を発刊するに当たっては色々と悩み考えましたが、忙しい中、快く執筆を引き受けてくれた支援室のスタッフや学生たち、編集にたくさんのアドバイスをくださった関係者のみなさまのおかげで、無事発刊できる運びとなりました。
また、昨年は東日本大震災という大災害が日本を襲い、多くの悲しみに包まれた1年となりました。遠く離れた私たちにできることの少なさに無力感を感じつつも、その一方で、聴覚障がい学生への遠隔情報支援ステムを使った授業支援など、私たちにも協力できることがあり、被災地支援の方法は1つではなく、みんなそれぞれできることをできる範囲ですることが大事なのだと気付かされました。
多くの被害に遭われた東北、そして福島の一日も早い復興と、人々の心の傷が少しでも癒されることを願ってやみません。
最後に、いつも本学の障がい学生支援にご協力くださっている教職員、学生をはじめ関係各機関のみなさまに深く感謝を申し上げ、編集後記とさせていただきます。（編集担当　吉川春菜）